

『徴』の構造

— 擬声語の語彙の研究を通して —

木村東吉

本稿の目的は、擬声語の語彙について国語学的認識を深めることにあるのではなく、『徴』の文章表現にもちいられている擬声語の語彙の分析を通して、作品の内部構造の一端を明らかにすることにある。

擬声語の呼称とその定義については、なお問題のあるところであるが、本稿においては、擬声語という一般的呼称に従うこととし、擬態語をも含めた広義の意味にこれをもちいることにする。擬声語の定義ともかわる認定については三つの問題点がある。その一は、擬声語と一般の副詞との弁別の問題。その二は、擬声語が単独で、または他の語構成要素と複合して、動詞（例、じめつく、だらける、いらだつ）形容詞（例、けばけばしい、せせこましい）形容動詞（例、ちぐはぐの）名詞（例、ごたごた、ごたつき、ぐるぐる巻）等を形成しているものを擬声語の中に含めるか否かの問題。その三は、もともと他の品詞のことばが重ねられることによつて、擬声語と類似した表現効果を持っているもの（例、冴々した、水々した、とげとげしい、赤赤と）についての取扱いの問題である。これらに対し

ては、擬声語と一般の副詞との間に理論的に明確な区別をすることが不可能な現状では、この弁別は研究者の言語感覚によるしかないと判断されるので、この点は筆者の主観的判断に従い、認定の結果については大方の批判を待つことにした。また第二第三の問題となる語彙については、参考とはするが、本稿では取りあげないことにした。擬声語の本来の姿にくらべると、ややその意味機能を異にしていると考えられるからである。

このような基準に従い、袖珍本初版の『徴』を底本として認定した擬声語の語彙は、延べ語数で三一七語に達した。新聞連載七九回分、文庫本にすると約一九〇頁ばかりの作品に、これだけの擬声語が使われているということから、『徴』の文章表現には、擬声語の使用量が特に目立って多いというわけではないが、他の作家の作品に比較すると多い方だといふことができる。このことは、『徴』の文章表現の特色の一つであるとともに、擬声語の語彙を検討することによつて、作品の特色を明らかにしようとする方法の有効性を信ぜしめるものでもある。

この語彙を、その語が使われている場所を規準として分類記述したものが、三以下の表である。紙幅の関係で、論旨に直接関係のな

い部分を省略しなければならなかったが、煩をいとわず文の一部と共に抜き出し、その語が使われている場所によって分類したのは、擬声語が他のことばよりも語の観念的意義が不安定で、使われる場所によつては、実に多様の意味をあらわすものだからである。語だけを単独に取り出して集めることは、意味を問題とする場合、無意味なことになるおそれさえある。特に、その擬声語が、オリジナルなものである場合や、語形そのものはありふれたものであつても、用法に特異性のある場合には、まちがつた判断を導く原因ともなりかねない。たとへば

○揉上の心持長い女の顔はぼき／＼していた。

△三回ベ一四▽（傍線筆者、以下同じ）

とある時、「ぼき／＼」だけを単独で抜き出しては、この表現の場での意味を正確に伝えることは、とうてい不可能であろう。

このことは、擬声語の表現効果について考える上でも重要なことで、この「ぼき／＼」の場合、読者は何となくその意味をわかつたつもりになるのであるが、それは自然科学的な意味での具体性を伴つたものではなく、心理的・感覚的印象を持つにすぎないのである。同じことが次の場合にもいえよう。

○指環や時計をびか／＼させた貴婦人が一人、手提袋をさげて、腕車から降りて入つて来ると、坊師は笑交すやうにしほ／＼した目をした。

△二回ベ九八▽

この「しほ／＼」する状態を、具体的に想像してみようとする、「笑交すやうに」によつて、具体的映像は定められ、「しほ／＼」はこれに感覚的・心理的印象を添えているにすぎないことがわかる。（注、このしほ／＼は講談社版日本では、しを／＼となつている。）

もちろん擬声語によつても、観念的意義は伝えられる。しかし、いわゆる擬声語らしさを發揮するのは、使いならされて観念的意義の比較的安定したものでなく、オリジナルな、したがつて、語義の比較的不安定なものの方である。この点からしても、擬声語の表現効果は、観念的意義の伝達よりも感覚的・心理的印象づけの方にその特質があることがわかる。

このことは、擬声語を多く使う文章表現の表現効果の特性について考える時にも重要である。擬声語の使用量の多い表現形態を持つた作品は、こまかな対象描写を通して、そこから読者に何か具体的な事実を印象づけ、それから自然にさもし出される感慨を味わせるのではなく、もつと直接的に、感覚的・心理的な雰囲気といったものを印象づけるであろうことが推測されるからである。具体的な例をあげるならば、

○二人は此頃T—の處へ届いた枝ごとのバナ、を手断りながら、色々の話に耽つた。薄暗い六畳から台所の横の方を透してみると、そこに深山が真の煙のなかに、これも原稿紙に向つてゐる。傍にパインナツブルの鐘や、びしよ／＼茶の零れてゐる新聞紙などが散らかつてゐた。そして蟻が気味わるく其處らまで這ひ上つてゐた。

△六回ベ二四▽

などの場合、枝ごとのバナ、を手断りながら、三人の男が話したり、何か書き物をしたりしており、パインナツブルも食べたらしいという状況は、ごく平和な、部屋は薄暗かつたにしても、むしろ楽しいな雰囲気を感じたくなる要素が多分にあるのであるが、その次にびしよ／＼茶の零れた新聞紙、蟻が這い上つてゐることが続いているために、一挙に不潔で湿っぽく不快な印象の場面として読者には

印象づけられるようになっていた。なかでも、「びしょく」という擬声語が読者の感覚に働きかける力は、注目すべきものがあるといつてよからう。

これを作者の側からいえば、一つの場面や情景を描き、それ全体に作者の表現しようとする感覚的・心理的印象を添える場合は、それが意識的であるか否かは別として、擬声語を使うことが簡便な方法だということになる。次の二例は、雨の降り方が「しとくく」である場合と、「じめく」である場合とを比較したものである。

○広縁のゆつくり取つてある、廂の深い書院のなかで、偶に物を書きなどしてゐると、青蛙が鳴立つて、窓先にある柿や海棠林檎の若葉に雨がしとくく瀧いで来る。土や木葉の匂が、風もない静かな空気に伝つて、刺戟の多い都会生活に疲れた尖つた神経が、軟かいブラシで撫でられるやうであつた。△五〇回ベ二二三▽
○海辺へ出て行くときの笹村の頭はさくくしてゐた。じめくくした秋の雨が長く続いて、崖際の茶の室や、玄関わきの長四畳のべとくくする笠触が、いかにも辛気くさかつた。(注、さくくくは、円本ではくくくとなつてゐる) △五六回ベ二四八▽

この二つの場面を比較してみると、雨の降り方に大きなちがひがあるのではなく、作中人物が、その雨を快いものとして感じているか不快なものとして感じているかを表わすために、「しとくく」と「じめくく」との語の選択がなされてゐることを知るのである。

このように見てくると、文章表現に用いられた擬声語の語彙を検討してみることによつて、作品の全体的雰囲気、あるいは作品の印象といったものの特徴がうかがわれるのではないかという推測が成立つ。そこで、以下、こうした点に注目していくことにする。

二

作品の雰囲気とか印象とかは、作品の部分部分によつて変化していることが普通である。したがつて、作品の構成に従つて区分できる場合には、語彙もそれに従つて分けておくことが必要になる。「徴」の場合は、主人公笹村が西の方の旅から帰り、下宿生活をやめて所帯を持ち、以後約六年間のことを、回想の形でまとまりをつけながら書いてある。その間に四度転宅し、二度下宿をしている。しかし、これも三つの家の記憶に付随する形でまとめられている。そこで、はじめて所帯を持った家を出るまで(四十回の終りまで、袖珍本で一八一頁)と、次に下宿を経て二度目の家を持ち、これを出るまで(六十二回の中ほどまで、袖珍本で二七四頁五行目)とで区切り、作品を三つの部分に分けた。量としては均等を欠くが、やむをえない。この量的不均衡が後の語彙表において、上段の語彙量を多くしている。

このように区分した作品の各部分から抜き出した擬声語の語彙を、環境・雰囲気等人間以外のものに関する表現にもちいられたものと人間に関する表現にもちいられたものとの二つに分け、人間に関する表現にもちいられたものでは、主人公笹村、女主人公お銀、その他の人物に関する表現にもちいられたものによつて三つに分けた。(笹村とお銀との両方に関してのべた部分のものは、双方にこれを記して頭に△印をつけた。両主人公と、その他の人物に関する表現に使われたものには、▽印をつけた。)そしてこれらの語彙を、その語が使われている文章表現の内容に即してまとめ、これを作品に出でくる順序に従つて並べたうえ、同じような内容を持つ語が複数

ある場合には、前の方に集めるかたちで整理記述したものが、三以下の語彙表である。ただし、その他の人物に関する表現にもちいられた擬声語七八例は、紙幅の関係で、ここに掲載できなかった。

この表を見わたすと、オリジナルな語といえるものは意外に少なく、平凡な日常語の範囲内のものが多い。これも「徴」の文章表現の特色の一つといえる。たとえば環境・雰囲気に関するものに限りてみると、「天象」の項に「雨がしぶく／＼降つて」とあるのが珍らしい程度で、作者が特に造語に工夫を凝しているとは見えない。これは文学史的に見れば、文章の美、表現の奇を競つた明治二十年代までの文学の文章表現に対して、一つの新しさであったことはいうまでもない。

語彙を量的、あるいは傾向といった面から見ると、「天象」の項では、雨に関するものが異様に多い。そう思つて見ると、「屋外」の項でも「屋内」でも、むやみとしめつぽさを印象づける語が多い。「べと／＼」になつた蒲団」などと不潔感を伴つた表現もある。今かりにこれらの語が占める割合を数量化してみると、「天象」の項では、全語数一九中、雨に関する表現に使われたものが二三例。百分比にして約六八％。雪に関する表現に使われたもの一例を加えると、もつとふえることになる。しめつぽさを印象づける語は、環境・雰囲気に関する表現に使われた語彙の場合は八三語中二四例で、百分比になると約二九％。中でもその二四例中、不快感を伴うと思われるものが半数の一二例。反対に快感を伴うと思われるものは、わずかに四例である。とすれば、これは作品の場面設定と無関係とは考へにくく、作品の題名「徴」との関連性が当然考慮されるべき問題となる。

作品の題名の「徴」という語と、しめつぽく不快な場面設定とが関係があるとして、さらに語彙の内容を、表現の内容に即して見ると、雨の表現の中でも、「しと／＼」という比較的快い印象を伴うと考えられる語は、そのいずれもが、笹村が家庭をはなれた場所であつた雨の表現であることがわかり、これとは対照的に家庭の場面設定においてはしめつぽい不快感が強調されていることがわかる。このことから、家庭の問題こそ作品の主要なテーマであるらしいことが推測されてくる。ただ一つ、「天象」の項、下段に「明るい小雨がしと／＼」といった表現があり、これは笹村が家庭をはなれていない場面の表現としては唯一の例外とも見られるのであるが、子供が病氣になり、その病氣も回復期に至つた時期の病院での表現であるから、そのようなことも理由の一つと考えられよう。

屋内においては、風が「すや／＼」と、快く感じられるというの、屋内の雰囲気の息苦しさを逆に反映していると考えられよう。そのような中であつて、快い印象を伴う語もないわけではないが、その多くが笹村が家庭をはなれた場面でのものであり、そうでないものは、すべて女主人公お銀の手によって整えられていることは注目される。「ふか／＼した蒲団は気味が悪い」などと妙な表現も出てくるが、半ば意地を張り、半ば自分の過去をなつかしむ心を冗談めかした表現であると知れば、納得できる。とすれば、お銀は家庭の中で、救いともなる存在であつたことが想像されてくるのであるが、そのお銀に関する表現にもちいられた擬声語の語彙によつてみると、次のようになる。

まず上段を見ると、安定した生活態度を守っている人物ではないが、きびきびした性格で、元氣は良いが品位に欠ける女性像が浮び

上つてくる。また時には、静かな気分にもなる平凡な人物であるといふこともわかる。ところが、中段では、元気のよい動作を表わす表現が少なくなつて、風貌・表情に関する表現でも、「じり／＼瘦せて」「ごき／＼した胸」とか肉体的おとろえを表わすものが目立つようになる。ここで、笑い方がどのように変化しているかを比較してみよう。

○翌日笹村は独寝の小さい蚊帳を通りて買つて、新聞紙に包んで抱へて帰つた。そして其をお銀に渡した。

「こんな小さい蚊帳ですか。」お銀は拵げて見てげら／＼笑出した。

○笹村は明方子供の傍に、突伏してゐる妻の寝た姿を見出すと言ひかけた。

「お前も疲れたらう。」
「い、え。」お銀は憊れた目を開けると、咎められてもしたやうに狼狽して顔をあげて嫣然した。

△六九 ペ三〇六▽

前者では、笹村の好意をも無視するかのやうに、無遠慮に笑つていたお銀は、後者において、笹村にしては珍らしい、しみじみとしたいたわりのことばに対してすら、狼狽して嫣然させている。もう一つ例をあげると、

○食物などのことで、女のすることに表裏がありはしないかと、始終そんな事を気にしてゐた笹村は、その時もそれとなく厭味を言つた。

「さうですかね。私其様事はちツとも気がつきませんでした。」
女は意外のやうに、そこへベツたり座つて額に手を当て考へ込んだ。

だ。

○「目がぐら／＼して、わたし何だかそこが真暗……。」

笹村の手に縋つて、廊下の方へ出たお銀は「あなた私もう駄目よ」と、泣き声を出して直にそこへ倒れてしまつた。

しばらくお銀は運動場へ出て、風に吹かれてゐた。亜鉛の板敷に、べつたり坐つてゐるお銀は、少しづづ、性がついて来た。

△七八 ペ二四五▽

の二つを比較してみると、同じベツたり(べつたり)座るにしても、その内容はまったくちがつており、前者はいわば一種の抵抗のポーズであり、後者は肉体的に弱りはた結果の行動である。このやうに見てくると、お銀の人物のイメージは、作品の前の方と後の方とで、まったくちがつたものになつてゐることがわかる。また、作品の後半に入ると、次第にお銀の感情的・心理的気分に関する表現にもちいられた語の占める比重が重くなつてゐることも注目される。これは、お銀に対する外面的把握から、内面的把握への移行があるためとも考えられるが、一方では次に見る笹村との同化の過程をあらわしてゐることも見ることができ、これらを総合してみると、お銀という一人物が環境によつて変化していくさまが描かれてゐることがうかがわれるのである。

笹村に関するものはどうかというと、いつもぶらぶらと落ちつかず、常に心をいらいらさせてゐる男ということになる。そして、作品の最初から最後まで一貫して変化してゐないことも特色である。調べてみると、いらだつことの内容には、少しずつ変化はあるのだが、その奥の原因となると「暗いその部屋を起つのが臆劫なほど、心も体も一種の慵い安易に浸されるのであつたが、矢張りいら／＼

した何物かに苦しめられてゐた。」と表わされているだけである。環境・雰囲気に関する語彙の中に、聴覚的印象を表わす語が一九例あり、そのうち一例は異様に静まった状態を表わしている（音を表わした語も二例含まれているが、その音のためにかえてあたり
の静かさをきわ立たせる効果を持っている。）というのも、主人公笹村の心象の投影と見ることが出来る。そして、笹村に関する表現に使われた擬声語の語彙が、動作や風貌の項よりも、心理的・生理的気分の項にかたよっていて、その中に、不快な気分を表わす語と見られるものが、三二例中二三例で、七二%を占める状態を見ると、

三 語彙表

環境・調度・雰囲気に関する表現にもちいられた擬声語の語彙

一回 (P11) ~ 四〇回 (P181)

天象

風が裏手の広い笹原をざわ／＼と吹き渡つて
かさ／＼と北風に鳴るその音を耳にしながら
外はざあ／＼雨が降つて
笹村は、寒い雨のぼ／＼降る中を、
通まで来ると、雨がぼつり／＼落ちて来た。
今朝しと／＼降る雨の中を、
底冷が強く、雪がちら／＼降出したが、
時々鶯が啼いて其日も一日じめ／＼して居た。

屋外

雨に濡れて石炭殻を敷いた湿々する地面

四一回 (P182) ~ 六二回前半 (P274)

天象

雨がしぶ／＼降つて、空は真闇であつた。
雨がしぶしぶ落ちて来た。
柿や海棠林檎の若葉に雨がしと／＼灑いで
その晩はしよば／＼雨が降つてゐるが、
じめ／＼した秋の雨が長く続いて、
町はどんよりした薄日がさして、
そよりともしない空気に羅宇屋の汽笛などが

屋外

木蔭の多い、じめ／＼した細い横町、

笹村に関する表現は、その氣質の描出に傾斜しており、その氣質の陰湿さは、作品の題名「微」との関連を考えさせるのに充分である。その上、作中に散見する遺伝を氣遣う笹村のこと、ともあわせ考えると、笹村を描いた作者の考え方の中に、人間を遺伝の法則に従つてとらえる考え方があつたことが推測されるのである。
そうだとすると、「微」という作品の題名が象徴するものには、雰囲気あるいは印象として表現された環境と遺伝とを見ることが出来る、ということになり、作品構造の一部に、ゾライズムの流れが受け継がれていることがわかる。

六二回後半 (P274) ~ 七九回 (P329)

天象

棕櫚や竹の葉がざわ／＼と騒しかった。
明るい小雨がしと／＼と灑いでゐた。
日暮になつても雨はしと／＼と降つてゐた。
その日は雨がじめ／＼降つてゐるが、

屋外

何かなしき／＼した床屋があつたり、

石で組んだ井筒には青苔がじめ／＼して
ざく／＼した石炭殻の路地口から
広々とした境内がシンとして、
鈴を引くと、ちやらん／＼と言ふ音が、
ゴ／＼云ふ鍛冶屋の機械の音が、
金燈籠の光がぼんやり光つてゐた、
可也手広な空屋がぼつ／＼目に着いた
柳の芽がすい／＼伸出して、
内儀さんの姿もちらほら笹村の目についた。

屋内

ざら／＼するやうな下宿の部屋
びしよ／＼茶の零れてゐる新聞紙などが
家のなかまじめ／＼してゐた。
そのべと／＼になつた蒲団も、
窓からはすや／＼した夜風が流れ込んで、
家の中は、空気が冷々して薄暗かつた。
茶の室は悶りして了つた。
悶りした二階の一室に通ると、
小さい家のなかは悶りしてゐた。
下宿は昼間もシンとしてゐた。
がらんとした其様の段梯子を踏むのが
開ける時キイ／＼厭な音のする安箆筒、
そこにカチ／＼言つてゐる筈の時計が
白い板敷も、つる／＼と動く、光沢をもつて
母親が釜の下にちろ／＼火を炊きつけて

直にがさ／＼した、荒れたその町に包まれた
その間をのろ／＼した腕車で、石高な道を
する／＼と停車場の構内から、(略)江出た汽車

屋内

畳のじめ／＼する茶の間の陰気くさいことが、
玄関わきの長四畳のべと／＼する畳触が、
時々冷々した畳へ熱る体を這りだした。
夜も冷々する寢床のなかで、
寢道具は、皆ふか／＼した新しいものばかり
老母の焚つける炎のちろ／＼燃えて来る。

屋内

お詣をする人が外の道からもちらほら寄つて
来た。
そろ／＼と換れる車が、
町はもう大分ふけて、風がしつとりして居た
竹藪からすい／＼した若竹が、雨にぬれた
古い油絵に見るやうな霧鬱した杉
其町は、耳がしんとするほど静であつた。
石のごろ／＼した白い河原の上流には、
松原のなかに、火影がちら／＼しはじめた。
梅のつる／＼した椽の板敷へ出て、
紛擾する病室を出ると
病室が、退院する頃にはぼつ／＼空ができて
来た。
影が明るすぎた部屋の壁にも冷々と差して
すや／＼した風が蚊帳の中まで滲みて来た。
病院のなかはじめ／＼してゐた
如何かすると森と静ることのある古い建物の
ボタンと戸を閉める音などが遠くの方でする

夜笹村はかんくしたランプに向つて

餘りふかくした蒲団は氣味がわるい

目の先にはくるく風に廻つて。る風車など

匙やナイフさへ幾色か、こちやく持込れて

書棚や、古い裝飾品のこてく飾られた部屋

本をぎつしり詰込んだ大きな書棚

家の内外には、ぎつしり人が塞つて

病床の周へ、人々はぼつく寄つて来た。

子供は掌のたらく流れる窓硝子に手をかけ

始終ごたくしてゐましたつけがね。

お銀に関する表現にもちいられた擬声語の語彙

一回 (P1) ~ 四〇回 (P181)

生活態度・性格

娘も当分親類の家にぶらくして居ります

さう何時もぶらくしてゐないで、

氣象もきびくした方で

私はこんながらくした性分ですけれど、

動作

ベツたり疊に粘着いて眠つてゐた。

ベツたり坐つて顔に手を当て考へ込んだ。

ベツたり坐つて、思の深さうに言出した。

ぐツたり坐り込んで思案してゐた。

ばたくと團扇を使ひながら、

蚊を、びたく叩きはじめた。

その他

金助町の家のやうな格子戸造の小瀟洒した

電車ちんく餡パン買ひに行つた

四一回 (P182) ~ 六二回前半 (P274)

生活態度・性格

矢張するくになり勝であつた。

動作

ベツたり坐つて、思の深さうに言出した。

裏へ出てぼんやりしてゐましたよ。

縁先に子供を抱いてぼんやり坐つてゐた。

彼方へまごく此方へまごくするのが

▽二人は日比谷公園などを、ぶらく歩いて、

△二人はぶらく須田町のあたりまで歩いた。

動作

縁側をぶらくして居ると、

△二人は腹ごなしに銀座通を、ぶらく歩い

た。

亜鉛の板敷に、べつたり坐つてゐるお銀は、

△勝手の手わからない人達は、其処らをまごま

ごした。

ぴしやんとその手を打った。

ぼつ／＼話出した。

何やらぼそ／＼と話してゐた。

女は上眼遣に人の顔をぢろ／＼見ながら、

そこまで来て彷徨してゐたこともあつた。

旋て悄々と引返して行つた。

私ぐん／＼蹠いて行つてやれば可かつた。

せい／＼肩で息をして、

術なげに手をもじ／＼させて居た。

お銀はせつせと其処らを雑巾かけてゐたが、

風貌・表情

揉上の心持長い女の顔はぼき／＼してゐた。

こつてり顔を塗つてゐるのを、

嫣然ともしないで、起あがつて

お銀は抜げて見てげら／＼笑出した。

涙を一杯ためた目元に嫣然してゐたが、

目をしほ／＼させた。

(※円本ではしを／＼)

おど／＼したやうな様子をして、

おど／＼したやうな目を伏せて、

△しんみりしたやうな話声

しみ／＼した淡い妬みの絡はりついた

気が快々して来ると、

その他

お銀が、ふいと暗闇で摺違つた男

お銀はぼた／＼と本にハタキをかけながら

風貌・表情

につこり笑つて見せた。

蠢動く産児を見て嫣然してゐた。

お銀は嫣然した顔をあげた。

火鉢の縁に頬杖をついて、にやりと笑つた。

手足もじり／＼瘦せて、

肋骨のぎこ／＼した胸は見るから弱さうで

乳もたツぶりして来たが、

女の頭髮は、根がゾつくり崩れてゐた。

がく／＼する頭髮を、痛さうに振り動し

お銀はちら／＼するやうな目容をした。

△いら／＼した二人の心持は、

気がおど／＼して了つて、

阿母さん体がぞつとするやうで……

▽そしたら些とせい／＼するかも解らない。

風貌・表情

狼狽て顔をあげて嫣然した。

お銀はつや／＼した紅味をもつた顔を撫でな

がら、

感情的・生理的気分

せい／＼した顔をして拭掃除をしてゐる

少しは気がせい／＼して好いかもしれない。

子供の顔を眺めて、落胆したやうに言出した。

時々お銀の頭をいら／＼させた。

ぼつりとしたものが出来るのも
金盥にねとくしたものを吐き出した。

快々するから何処かへ行つて遊んで来ませう
其時は何だか頭がかアつとなつて、
お銀は頭胸がぐらくするほど、眩暈がした。

ぼつとしたやうな目には、
目がぐらくして、

笹村に関する表現にもちいられた擬声語の語彙

一回 (P. 1) ~ 四〇回 (P. 181)

生活態度・性格

大阪にぶらく遊んでゐた一昨年

動作

ふらりと下宿を出て行つた。

晩方ふいと家を出て、下宿の方へ行つて見た。

▽自分達は、一日ごろごろ寝転んでゐて、

四畳半でぼかんとしてゐた。

部屋の壁に倚か、つて、茫然してゐた。

▽ぼつく話をしながら、箸を取つてゐた。

▽ひそくした話声が暫く続いた。

気を引立て、ぼつく筆を加へはじめた。

息もつかずづんく筆を著けて行く

ちらりと見た笹村の目には、

笹村の目が、ちらりと女の顔に落ちた。

裏の空地を彷徨して、

笹村は其処らをぶらくしながら笑つた。

笹村は町をぶらく歩いてゐた。

笹村はづんく行出した。

笹村は寢床の上にぐつたり横はつてゐた。

四一回 (P. 182) ~ 六二回前半 (P. 274)

動作

笹村はぶらく家の方へ行つて見た。

笹村も正一をつれてぶらく行つて見た。

私はまた貴方に、カツと来られると

ふいと少しばかりのマナーを懐にして、

漸とうとくしかけた眼がふと覚めると、

△二人はぶらく須田町あたりまで歩いた。

六二回後半 (P. 274) ~ 七九回 (P. 349)

動作

笹村はびしやりと其頬を打つたが、

△勝手のわからない人達は、其処らをまごま

ごした。

笹村は子然と壁にもたれて子供の寝顔の番を

してゐた。

子供を抱出して、廊下をぶらくしてゐた。

△二人は腹ごなしに銀座通を、ぶらく歩い

た。

うとく好い心持にまどろみかけてゐた。

ふいとステーションへ独りで出向いて行つた。

畳のうへに直りと骨ばつた背を延した。
まじく煙草を喫してゐた。

うつら／＼して居た。

風貌・表情

笹村が時々憤懣して、深山に衝突る

「煩いな」笹村は憤々した。

感情的・生理的気分

いら／＼するやうな心持で、

始終いら／＼したやうな心持であながら、
せい／＼するほど綺麗に拭掃除がされて
胸にぶす／＼燻つてゐるやうな餘憤が
憎悪の念が、一時に勃々活復つて来た。

もだ／＼した胸の悩みが何時も吸取られる

しみ／＼自分の胸に通つて来るとは

しみ／＼感じずにはゐられなかつた。

ランプの灯に、目がちか／＼するくらゐ

目がちか／＼し過ぎるほど、
とき／＼する心臓を冷してゐた。

筋肉に時々しく／＼痛みを覚えた。

頭がぼーツとしてゐて、

頭がぼーツとしてゐた。

舌にいら／＼する手捲頁を喫してゐたが

その他

自分の生立が、まじく／＼と胸に浮んだ。

風貌・表情

笹村はにや／＼してゐた。

感情的・生理的気分

しみ／＼其処のなつかしい空気を嗅ぎしめて

▽しみ／＼話したことも無かつた母親の

笹村の心をいら／＼させずには置かなかつた。

寝起の笹村の頭をいら／＼させた。

舌にいら／＼する昨夜の酒に、

△いら／＼した二人の心持は、何処までも

笹村の頭はさく／＼してゐた。

独でもだ／＼と頭を悩ましてゐることが

心臓をとき／＼させながら、
(※円本ではくさ／＼となつてゐる。)

風貌・表情

ちろ／＼した笹村の目に映つたのは、

感情的・生理的気分

いら／＼する笹村の頭には、

さう焦燥しないてゐる方が可ごんすよ。

笹村は、如何かすると気がいら／＼して

矢張りいら／＼した何物かに苦しめられてゐ

た。
自然は気をいら／＼させる退屈な田舎の松並

木に過ぎなかつた。

真に舌がいら／＼して来ると、

妙に笹村の頭をふら／＼させた。

その他

指頭にべつとりする額の脂汗を拭ひながら、

〔付記〕 本稿がなるまでには、磯貝英夫先生、藤原与一先生の懇切なご指導をいただいた。記してお礼を申しあげる。

なお、本稿は、昭和四七年度広島大学国語国文学会秋季研究集会において発表したものと、ほぼ同じ内容のものである。

— 広島大学大学院学生博士課程 —